續後拾遺和歌集　下

特別
へ4
8099
16(2)

へ4
8099
16
(2)

<2001-036>

續後拾遺和歌集巻第十一

戀哥一

題しらす　　花山院御製

おとはこそきゝそめしか山のはにいとゝこえや恋もまさるなかな

權中納言敦忠

抱すりにしはいよいよまさる思ひみつとはゝ恋そまさりける

讀人しらす

道のへの花をみしよりむすふこといさしらなみの猶まさるらむ

洞院攝政家百首哥に忍戀

前中納言定家

うへし若垣ねのくまれぬと篠のしらぬ恋にはこえしゆかし

早稲田文庫

題しらす　坂上郎女

夏の野の志けみにさけるひめゆりの志られぬ恋はくるしき物そ

題しらす　よみ人しらす

ぬくもなく思ひしものを志のふ志てたのみし人をあまりてうらみけり

恋歌中に　八條院高倉

いまはゝや人に志られむ身のけふり志る志の雲に志めはしをさき

式部卿久明親王

志らやいかにたのめの山の峯の雲かへりもきえぬ身をしりてこそ

平貞文家歌合に　躬恒

久堅の雲井にとほくみえてゆくあふはかりなき物をこそ思へ

題しらす　忠峯

加國のしられぬ海への底のしらなみおもひはわかるけさの袖かな

源重之女

人とはゝおもひとなれなたとへむしら浪の底まて落るなかりけり

今出河院近衛

留まらぬ袖まてかけていかにせむ恋のなみたのあまる夜の袖

文永二年七月白河殿七百首歌に寄煙恋　前大納言為家

侘ぬれはいまは身のたえぬとも恋ひしなはてゝむなしき志るしの煙

恋の歌中に　昭慶門院一條

我おもひ雲井にまかふ志のふれはたれかの煙にまよふへきかは

前中納言資名

まく河秋をこそしれ夕煙いつの夕をか思ひわすれん

建長三年九月十三夜歌合寄煙恋

前参議忠定

恨川またのあはれはさそのありさまとたえぬ煙のそこはかとなき

題しらす

法印宗円

しほかまのうらみも煙のしたもえにつもりてはてはおもひなりけり

観意法師

しられしな恋のほかなる入あひのみこえられぬまに玉のをの下にみえてけり

中院入道右大臣中将に侍ける時家に歌合し侍けるに

左京大夫顕輔

しかのあまや焼けふりたつ煙のすゑもしらなくに

入道前太政大臣家にて百首歌よみ侍ける

寄言恋

法印定舜

うちはへて藻にうつ煙のいつとなく結ひかなしき恋にこかれん

たえす恋を

頓阿法師

かゝる身のおもひあまれる煙にもえはてぬともしらぬ人かな

知らせそとの事を

藤原宗泰

おもひのみ立ぬるも人はしらしかし煙のすゑもさそはれなん

寄煙恋といふ事を侍けるに

前道胡(?)

わすれはや侍る煙のたえぬ身は思ひのみこそ神そこになれ

題しらす

権中納言實忠

さらにかく神にならせたまふ川我か身ひとつの暮をなすらん

中宮

たのむ神の瀬々にむすひおきし世をたのむ中川の水

千首歌よませ給ふに　後宇多院御製

これまてもかはらぬ御代の恵にて神の光はあらはるらむ

思恋の心を　中務卿宗尊親王

恋ひわひて我名をたてよ神やまの浅き恵にたのむもろ人

嘉元百首歌たてまつりける時神祇を

法印定為

人の世の志の深さたのむにそ神やふる杉の下にちかへん

題しらす　人麿

杉むらの枝をたゝりと思へはかねてそ衰ふるかなみかきそ

いかなる時にか人を恋そめにけむ

圓融院御製

住吉は我よりさきに松の世のためしにひける神のみかきに

文保百首歌たてまつりけるに

後花山院内大臣

松もあまりみしよりも又いかなる人か心にまかせてたのむ

百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

身ひとつのせきあへぬ神の瀬々はへ人の名をさへなかすやはきん

寄枕恋をよめる

津守国助

志ぐれたる[illegible]

嘉元百首歌奉りし時忍恋

せめて[illegible]

前大納言為世

関白太政大臣

恨[illegible]

天暦の御門[illegible]給ける

女御徽子女王

秋の野の萩の下葉も[illegible]

題しらず

平時村朝臣

数ならぬ[illegible]

弘長三年内裏百首歌奉りし時寄枯恋

前大納言為氏

[illegible]志のゝ杉の下紅葉[illegible]

恋歌とて奉りける　後嵯峨院御製

久堅の月[illegible]

家の集[illegible]　後一条入道前関白左大臣

志のゝ里[illegible]

題しらず　九条右大臣

人志れず[illegible]

後宇多院に十首歌奉りける時寄雨恋

藤原為親朝臣

紅のやしほの岡の神なひに秋の色なほとなと

建保四年百首奉りける時

常盤井入道前太政大臣

今年の秋の松に露の色こそ神なひの

題しらす　御製

川のみにみなに見てそらへむ人をたのむも

文保百首歌奉りし時

前大納言経継

今も猶志賀の浦はの波のなからと思ひやしる

恋哥中に

贈従三位為子

なにはかたあたに浪のかかるも

大江政国女

あひ見てもあはぬ夜なかの袖の上に

欣子内親王

おもひ川人の心のあさせにもわれ

従三位親教

あさかやまあさくも人をおもはねは

達智門院

待ちかねて浦ま風塩やく煙

左京大夫顕輔家歌合に

従三位頼政

恋の山しけきをささの露わけて

題しらす　　丹波忠守朝臣
かゝり火の程をみくとおもひまたれぬる恋の身にあはまし

正治百首たてまつりける時　　源師光
なかそよ人やしるらむおもひたえぬ思ひの身にあまるかな

題しらす　　伊勢
しのふれとはきみか袖なきためしもはかなくきえなむ身なりけり

左京大夫顕輔
しのひとはおもへとも袖にあまる涙はしのふにもあまりけり

藻璧門院少将
袖の上にそめしはしめのいつはりにならむともなくおもひそめけむ

平泰時朝臣
露をしのひし袖のなをそれかはしのふにわかおもひかれ

後西園寺入道前太政大臣
いかにせむ人めにあまる袖の露さそふ秋風の音たにもなし

よみ人しらす
秋の夜の人をまつとてあまの河原をなかめつゝ

宣耀殿女御のはかなくなりにけるころ
てかけまてもなくて侍りけれは

藤原実方朝臣
七夕のあはぬ歎きのしのひ音をかはすとききぬかな
娘ふりゆくかたの涙のはてにかはる文をそなかむる

さくら宮内卿に遣してつかはしける

伊勢大輔

かとへ人ちらさて雲ゐにかけたらは梅の花たゝふるさとゝそ今日見ん

さひしさは又ゆくまて世に色なきせさりける
けれはけるかな

兵部卿元良親王

山かけのかりかりのねぬ川さゝ雲井のうへにそ絶すなる

題しらす

新院御製

むかしの名をとめて月やなにそかゝる新たなりとてもやすむとや

中納言家持

春日山あさたつ雲のゐぬ日なく見まくのほしき君にもあるかな

近江更衣にたまはせける

光孝天皇御製

あさま山朝ゐる雲は風にたにたゆたふものを我そかなしき

題しらす

中納言兼輔

阿曽の山みねゆく志て雲のたちぬれはなにおもひ埋とこそ見ん

中納言家成家の歌合に

読人不知

あふことのなけきてたにもゆる煙そうき雲となりてそ

宝治百首歌たてまつりける時

前大納言為家

伊勢の海あまのかるもやかやけさぬ日なき煙

題しらす

土御門院御製

いせ海やみるめか浦にあらねとも貝あるかひそ志ほたるゝ袖のみつさ

二品法親王覚助

志らせはやよるへも浪のうへの旅ねの月かけてすむとも

順徳院御製

みさこゐる浦の旅ねよよるの玉のありとはみえてまたぬるゝ袖

弘長元年百首歌奉りける時不逢恋

常盤井入道前太政大臣

契りてもあふ心を松の浦なみかさ旅ねはよそにみえまつ

題しらす

後鳥羽院御製

わかあはれたのむ心の松は世にいつかわかよのみるめかなしん

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に寄網恋

洞院摂政左大臣

年をへてわかれぬ年の松をこえて心をかけしかひもなき日を眺め

寛治百首歌たてまつりける時寄瀧恋

花山院内大臣

岩根こす瀧の志ら糸あはれなるおもひ志られて恋もさやなる

題しらす

紀俊文

物思ふ我世の沢に水のなかれぬ物はありて今ひかき

式乾門院御匣

松ゐ川わたせと志らぬ水の上にかくれ消ゆるありてこそ消なん

常子内親王

しらなみはわたりも岩の恩川にて世の神のあはれこそ知れ

従三位氏久

名とり河あまくたりしむかしよりたえせぬ神祇

後頼朝臣

たのもしな岩もる清水すみかはるまてかはらぬ神の心

寄水恋といふ事を　伏見院御製

いかにせんむすひし清水のあさきにそかけしちかひのあさき契を

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

志かはりきむすふたのみの水かけてみそきし神の心のうちの岸

八条入道前太政大臣右兵衛督に侍ける時家歌合

侍けるに寄泉恋　左京大夫顕輔

まつ恋はむすふ泉の下にのみたえすなかれて神かけてみなれ人

續後拾遺和歌集巻第十二

戀哥二

題しらす　讀人しらす

あふまての年月をなとか待ちつらん我恋しなん命なりせは

人丸

いさゝめに松の色ハことなれと玉かつらたえてみえねハ恋しかりけり

安嘉門院甲斐

恋の歌とて

いはまてハうきに絶けるたまのをのなかきためしと思ひしられん

従三位頼政

わきもこかすそになひく黒髪のみたれや物をおもひみたれん

よみ人しらす

玉の緒の恋にあらはれかへりけむ世にもなかくそ恋しかりける

藤原眞風

恋しさハおなしこゝろにあらすともこよひの月をきみ見さらめや

貫之

あひみしと思ひし物を命にてはかなきまてもなからへにけるかな

後二條院御製

かくてのみあはてとなかき年月もうきハうき身のとかにそありける

文保百首哥たてまつりし時

前大納言為世

なかき世もさめぬなかめや物思ひの入やる恋の夢はかなさ

恋哥中に

法眼行済

おろかなる命をたのむ中々に我身のはてそあはれなりける
中臣祐臣
かはらしと思ふ心は恋するをあはれとも見よ君そつらき命なる
惟宗光吉
をしからぬ世にをしからぬ命こそあるにまかせてつれなかりけれ
藤原經清朝臣
あはれとは命にかへて世になからへてそ見る我身なるを
正治百首歌たてまつりけるとき
仁和寺二品親王守覚
忘らるゝ又こゝに世にめくりきてむかしの君をそれにこそみん
題しらす
為道朝臣
むくひあるはてはなき人にこそあれかきさよ八幡山そすまれ
関白太政大臣家歌合
さりとも世にむくひ思ふこそ又恋ふるむしろにさ
法印長栄
おもひ佗ぬるそうき世はさきの世のむくひは人のなき孫も
宣旨典侍
さきの世のむくひとおもふきく人の心をそれはまさるめ
六条右大臣頭中将に侍りける時歌合し侍りけるに
よみ人しらす
心ある物はおもふとはつきもなれさへ恋川なけくなりけり
はかりなりきみの中にはなりけり

藤原長能

よそにのみおもひふ人のさとにのみ春はめくらぬひとときそなく

長久二年弘徽殿女御歌合に戀

赤染衛門

菫さくかたをやとかりふる人は春の野はらにつませけり

戀の歌中に

和泉式部

菫にはふかきいろやと思ふれはしたの枕をこそむすひて

藤原為經朝臣

菫さくこそはみなといふにつみてまし人こそなさけなるらん

伏見院御製

めつらしきわたりのみちはかきいはせしのひのすみれかな

百首歌奉りし時　入道前太政大臣

いかにせむまつ人ははやくちるすみれ人のちからなるらん

前僧正實伴

欲見ひとりめつるものなくさみにすみれてつむ人のあるならん

文保百首歌たてまつりし時

津守國冬

なけきつゝめつる物にすみれにしほやむかしのあとかなしみ

家菫といふことを　大江忠成朝臣女

たちさきてすみれひらくにもしらぬきつゝなるらむ

賀茂經久

わかれのあとにすみれのはなのなかに別かなりけり

人のもとにつかはしける　藤原範永朝臣

昔より恋はせしかど身なれてもゆくへもしらぬ人はなかりけり

いはでのみつれなき人を待つ身をたのみてこそはなほ恋ひわたれ

題しらず　小野小町

今宵こそかはらぬ物をいにしへもかくやは人につれなかりけむ

天暦御時歌合に　源順

年ふれどつれなき人を恋しとや我身ひとつは秋にあはれぬ

弘安百首歌たてまつりける時　前参議経清

松はくれあひみぬ先に世はつきぬ涙やうらにこひわたるらむ

弘長百首歌たてまつりける時不逢恋　前大納言為家

年経ぬるはかなき夢のしるしにてあはれまたるる秋の夜の月

題しらず　平貞俊

玉章のかよひたえにしはかなさはあひみてのちもかはらぬものを

法印定為

たのまじな命のうちの月日にもあはれわすれぬ人のなかりし

文永八年七月白川殿にて人々題をさぐりて百首歌よみ侍りけるに不会恋　後嵯峨院御製

涙のみもるや関屋の板びさしあはぬ月日をさしてへだてつ

後宇多院十首歌めされける時寄関恋

右兵衛督為定

いつまてか人まちせんあふ坂の関のこなたにたちとまるらむ
まつかせを

伏見院御製

あふ坂やたつあからにも関路こえて我かたそへの[illegible]ゆくらん

百首歌奉りし時　　権中納言公雄

こえわふる人をもまたぬあふさかの関をはいとはしかひやなからん

題しらす　　郁恒

なれたのみきけはかひなきあふさかのゆふつけ鳥はなきてかひなし

正治百首歌たてまつりける時　　皇太后宮大夫俊成

根をたえてなかれはせんあふさかの[illegible]かなめなけれ

題不知　　藤原盛賢

たひかひもなけれはあふさかの浦[illegible]あまの[illegible]

法印禅隆

のちのえぬやせの[illegible]縄[illegible]中に[illegible]

源邦長朝臣

あくからはなりゆくはかなきやみのよの[illegible]

百首歌たてまつりける　　僧正行意

いそのかみふるさとをなかめ[illegible]の波に袖かけて

恋歌中に　　西行法師

[illegible]の[illegible]人をわすれぬ[illegible]

百首歌奉りし時　入道前太政大臣

なをも由世のよのみならへらひよなれ秋ぬるなきゝなをもなり

宝治百首歌たてまつりけるに寄濤恋　従三位行家

年月は涙にくちし我袖のみなとや恋のとまりなるらん

恋の歌とてよませ給ひける　院御製

いつはりの涙かゝらし袖にも庵るはあはれなる月そうらめし

百首歌奉りし時　前関白左大臣

うき身にはつれなき中もしら露のきえぬやなき暁そなき

逢見し夜　後嵯峨院御製

あふことはかたくむすひし白玉のおきけぬる人をしのひ庵にて

右近馬場にて人々ひとへ郭公たつねかへりて待

宵の間に見えける人の恋の心を　基俊

逢事はさむさをひなるわきもこか袖よりいつる月もみえき

千五百番歌合に　醍醐入道前太政大臣

あまそゝくなけくまりし夜を思ひいてゝなけかはまつむもひとつ涙も

文保百首歌奉りける時　前左大臣

はかなくもかくてや人の思ひかはまなかなとひさやをまさ

普光園院前関白内大臣

よそにのみ見る川波にうきねしてかりそめにいふ枕かはさん
恋のならひや　衣笠前内大臣

いかにせん山さへ恋のくるしきにゆけは衣手ぬるゝ恋川
　前大僧正慈鎮

わか恋は難波ほり江のあしの根のしたにみかくれてそのとしをふる
　九条右大臣家にて恋の歌よみ侍ける次

うきはなれつるあらそ(?)のみをたなれはてぬなそ人ふかき心もせね
ぬし　九条右大臣

よそにしもかゝるなかめの秋(?)まてそ契(?)まて(?)いつまてかこそ
宝治百首歌めしけるに寄草恋
　後嵯峨院御製

恋わひくさすてき草とならしもえもしたもえて絶
寄枕恋　前大納言経長女

こよひかくふしけさひのたもとにはさこそ枕の秋の夕露
法性寺入道前関白家歌合に
　待賢門院堀河

なきなとかはらんなみたあたなみもたもとにうきてとしふれは
恋の歌とて　中務卿宗尊親王

浪の川岩にしたるたきつせのつれなさ恋のたえまにもけさ
　前参議雅有

堀江こく浪こえて袖の岩こす松ぬるゝ年ふる袖のつれなさ
　藤原清輔朝臣

いにしへをかさねし山のおくまても尋ねてこそは恋しかりけれ

前大納言為家

おもひ入道まては思ひしかともあはれさも我心に志け山

文保百首歌たてまつりし時

前大納言定房

年月はさそなかりけんうきにさへ恋しさまさる身となりぬらん

中将に侍りける時家に百首歌よみ侍りけるに

中院入道右大臣

あひみむとなけくほとのおもひは侍しか命のなかにたえぬ緒

鳥羽殿にて人々歌つかうまつりけるに恋の心を

権中納言俊忠

恋すとも白糸の世はあはれさのかきりもしらぬ人のなからん

題しらす

読人しらす

恋ふかきにしゐ恋つきせぬときのなくさはかなしき物とおもひしりぬや

後嵯峨院に三首歌たてまつりし時人々恋

後深草院少将内侍

わすれをもやすらのはらの津の国のなにはたてのみ恋わたるかな

恋歌中に

藤原為嗣朝臣

はかなきはよそにたに人のいつまてかなとはかりてもかなしきなかりけり

祈不逢恋といふ事を

贈従三位為子

祈りこしかみのしるしはなきものをつれなき人のまたいかにせん

平親清女妹

なりひ侘いはつるかすかなるたそきのゆきあひまさる人そ悲しき

邦省親王家五十首歌に不逢恋

祝部行親

たのまれぬあはれはかなき契のはてゝ人の心かはり月日なるらは

題しらす

平宗宣朝臣

たのまじと頼みそたのめかはりけりなけりふるやちかはりなるらん

狛秀房

あとなき義をまつて頼みそたのまるゝいとふを志さぬふかまれ

権律師浄弁

なほさりのことの葉まてもいはれぬるたのむそらいなまし寿え

大納言親房

行末は心をしらぬ言の葉をわすれぬ程はちきりなりけり

文保百首歌たてまつりし恋

従二位宣子

契りしもあらぬ十年はいさや我さなからましの淵のあさ瀬

十首歌めしけるついでに寄河恋といふことをよませ給ける

後宇多院御製

思ひ川思ひてたえぬ涙のなかれても世の中にちかはれぬ

名高恋といふ事を

従二位行家

なかれてはうき名をせかぬ身をしらは涙いさせ中川の水

契恋を

贈従三位為子

憂かりける月来とのみたのむなよなよまちならへさやまさらん

二品法親王覚助

さそともにあもと志らぬ世の契りこそたのむよつけて
かねてしるけき

續後拾遺和歌集巻第十三

戀哥三

女の返事をせさりけれはなけける物をとて事ある
ともそ

平兼盛

おとの葉をなけける物と知りなから思ひ何かいふの情なるらん

業平朝臣むさしの国いるまの郡みよしのゝ里に
すみ侍りける女の母なむかの人にと心つけたりける
と聞ひけるにかの人の母のもとよりいひおこせ
て侍りける

読人志らす

みよしのゝたのむの雁もひたふるに君かかたにそよるとなく
なる

在原業平朝臣

秋くにはうこゝのみうらのなゝなのむかしを月にとふ人

題しらす　人丸

足曳の山鳥の尾のあけぼのとさえ秋の月あかしの浦にすみそふ

よみ人しらす

久堅の月の明石の松かえに秋さへ深く月のさやけさ

基俊

ちりはこりかゝりけるたに明石のうらもさらにさやけき

順徳院御製

わたつみの松明石の宮やすみ人の秋をしたふる月のあはれ

文保百首歌奉りける時

右兵衛督為定

なほさりにうつりしのふこの浦の月にさそはれ海士の釣舟

雑歌中に　平範貞

いつよりや松にひかりのたえなむうつりし絹なるひかりはなれなりけり

鷹司院帥

すみ人の出ぬる隅の秋の月影このあはれなるあなあはれなり

光明峯寺入道前摂政家にて二十首歌よみ侍りける時

前大納言資季

いつまてもなほ明石の浦の…浦に月すむ秋さへの月影

なほも浦

大江頼重

いはふりとおもふ浦の絹にひかりのつきぬ山の端の月

弘安百首歌奉りける時

式乾門院御匣

まち出る夕の涙よくもりけりこゝろ秋あはれの在明の月

題しらず　平政村

たのめ秋にこゝろひくとは流れともうき世の中のすゑぞ遠き

前中納言定嗣

まちみし涙の秋のよとて連はおなじ秋のちかき月影の人

讀人しらず

いりし日とおもひし涙はむかしのうきよやまはなれん

百首哥たてまつりし時　関白太政大臣

おもひそとおもひかさまやなくさめかねつおもひいたりはかなきの事

来不留恋といふ事を　前大納言為氏

まつくらふ心よりなのまれしわがよ涙のなかはおもひやらるゝ

中務卿宗尊親王家の哥合に　前左兵衛督教定

おもひのむしむなしくれの夕のうへにおなしき心のあふせ

後宇多院に十首哥たてまつりし時逢壊恋　権中納言公雄

いかせむあふ涙のかはのそてにいかさめの逢は

十首哥に祈逢恋　藤原為明

たのめしそれはなりけるなかのよかせの神のうらなり

なく涙くもりせしあさひこそ恋しきありさまの心なりけり

侍そと思ひしへす卯月のけふもかはらぬあふひ

藤原清正

ちはやふる神よりはしめあふひ葉にかけて今日こそかみまつり
なり

読人志らす

みかさ山のなへくかさせはおもひ草川せをそれとおもひしらなん
萱しなれ

安部仲麿

榊葉の枝すゑをかさしてきめくらしふ神のあふひ草

常盤井入道前太政大臣

露ふかき新手枕の上川お花いつらし海てなれちかなる

建保内裏歌合に寄道恋を

前中納言定家

難波なる方をはかりて見かひそふさみゝさき葦の一葉なりけり

恋の哥中に

為道朝臣女

葦わけて立川とおもひしを難波なる葦のかりねの一夜けにしは

前大納言為家

うきふしと枝かれぬ物からあふとて葦ちるよの末もひとよなりけり

文保百首歌めしける時に

後宇多院御製

あふとみる夢をうつゝもいかにしてゆふつけ鳥のねにわかるらん

恋の哥とてよませ給ける

院御製

かも川へさき馬のりさ夜の別ちいかたもいとふかそなたさとのかへ

為道朝臣

いたくさへあかつきぬる別には鳥の音をこそかこたん

うき色のそれとこそも花をさそひてまさりけり時

別恋を

権中納言公宗

よそにこそ中〳〵あるはなくさめつゝまちし人のなさけなりけん

後朝の心を

前僧正道性

あけぬとも鳥の音きかぬ程ならはつらき別のなからましかは

平惟貞

鳥の音をいはゝ恋ふとやたのもしきたか別にかきれる月をのみ見

嘉元百首歌たてまつりける時暁別恋

民部卿為藤

鳥の音はなにゝさためてかなしかはおもひあへぬ別なるらん

兵部卿元良親王家歌合に

読人しらす

涙河せにかへてあふ瀬のありときかはわかれのさきにゆかましを

恋歌中に

鷹司院按察

あふ事はなきをもあはぬたえしき涙よかならすわかるゝまをはし

平兼時

おもひきやはかなきけしきもおなしやまのほらにかくまてはひとり

前右大臣

あふまてはたきつせ心のかはかりにおもひのまゝの月をみるらん

遊義門院

はかなしやゆくへはいつとしら露の枕そわかるゝ袖に消なん

知院侍従に申て後はひつかはしける

忠義公

露とのみおくわか袖はわかれてはまたあふまてそかなしかりける

返し

知院侍従

きぬ〳〵のわかれにそいとゝしらるゝ別をいそく夏の夜そうき

百首哥めされし次に　御製

月やふけゆくいとゝあかねの袖の上にほのかにしるき明ほのの月

弘安百首哥めしけるついてに

亀山院御製

めくりあはん今の別をいかにせん我よにはつらきありあけの月

返し

藤原雅朝朝臣

いかにせんあたに別のかなしさにあかぬ命なからへて

中宮

ゆくさきとしらぬ身なれや今をこそなき別つるなこりなりけれ

洞院摂政家百首哥中に後朝恋

藻璧門院但馬

おきわかれあかぬ名残をしのひこしまたなき涙そおもふかほなる

法眼行済

たのめしを

ときわかぬ別の枕の彩はたゝひとりとものなかれ

寄雲恋といふ事を

藤原経有朝臣

明やらぬ空をかへりみて雲よりも別てそ袖をしほりける

題しらず　藤原元真

いまはまたなけくの後をかく衣袖なるらんのまてしも

女御徽子女王まゐりて後いとまれに行幸せざりければ　天暦御製

ねきことゝ何とおもひしなれども衣いく数まさるとは神のみぞしる

恋の歌の中に　前参議雅有

あふ事はかた見の夜半はせで夢ばかり人恋なりゆくらん

二品法親王慈道

何せとてあふとぞなりにし忘れてすらん後なきに中空の恋

栄性法師

作りけるを知の清みてはたゞくぞ命のかぎりとぞ思ふ

題しらず　人丸

夕風そこたにたつまで思ひ出ぬらんおもひ出てかよへ人

たえり行く世にはあさましき年をへてまたたゞ我世

山辺赤人

春雨の庭もしめりたちて秋いとひさしくあたらしき

源宗于朝臣

うちはへてかれにし人をあひ見る時ぞ恋しかりける

藤原冬隆朝臣

帰恋の心を

そのつゝあふ数ありしをなのにふくらむ心にありぬるむかしの

貞治百首歌たてまつりける時寄恋

後深草院弁内侍

みなれのあさちの末葉にもぬかさにはをしくれ

土御門院小宰相

たつふむそことをあさちか原のよはにもあはれよかたらせ

建保二年内大臣家百首哥に

源有長朝臣

あさちふのときはつ原にたちまよふ人のこゝろのむすほれけるを

家に五十首哥よませけるに

入道二品親王性助

むすひをく契りもしられぬさらに帯ならてあふ夜半もやあさち

逢後忘恋を

源邦長朝臣

あさせての名をもすれはかはらむしるひとのゆくへのしたさはき

天暦の比内の屏風に

源信明朝臣

花かれとつれなきあさかの沢に何かはなきものをしらせむ

文保百首哥奉りける時

菩提利華院前関白内大臣

契りこそあさかの浦にみるめもいやましにとそ人をこひける

題しらす

平師親

忍ふへきはなかさたに涙のたえやかさなりなまし

かゝる夜のあはれとこゝろの忍ひとてさかりもいかにゐなか

さむしといひそよせの宣命のまたの事に

馬内侍

恋しさの忘られぬはあはれとて忘れぬ待まの萩なほまさりぬ

題しらす　　祝部成久

わすられぬ海は河ともさたかなしくもなひかれたるとは音なかりせは

廉義公の家の哥合に

讀人しらす

あひ見んと座そかやこ思ひしよ夢まよひぬれはなかりけり

逢後顕恋といふ事を　權中納言宗母

ならてたにおもひのあふものをえぬいつくにかたれもしらん

寄衣恋を

光俊朝臣

ぬれてよふいかなる袖の色なれはすゝきのまゆ袖のうらみん

欲絶恋といへる心を　津守國道

我中はくもゐのかりにあらねともなかき秋をうらみなからも

西宮源大臣家にて

權中納言敦忠

わすれなむとおもふ心の花すゝき袖にみたれてかきりなき哉

題しらす

中務卿宗尊親王

花すゝき秋のの枕のかりそめにまてとはたれか恋かれ

藤原高遠

あまのかはせとあふ花のかけにてみえしもの

前大納言實教

うきにのみ人の心やかはるらむかけて忘れぬ秋の思ひに

後二條院御製

侘ぬれはさもあらはあれと花ゆゑにあたら心のなほやうつらむ

伏見院御製

あはれむのこゝろは風を見月をのそみてそ人を思ひなりけれ

弘安百首詠そよませ給ひけるとき

大藏卿隆博

露むすふ花の色香のことあさはけふきつる風そいなふ末ふく

光明峯寺入道前攝政家三十首歌合寄帯恋を

後鳥羽院下野

いはやあそに契やむすひとけし花田のおひのこゝろやすさは

たのめしひらの名たにならぬと思ひてけるを

兵部卿元良親王

今はたゝやみのうつゝの雲ゐにもこえむものかはなほ忍ふらん

題しらす

相模

いつとなく波のうへにすむまつのかけそみえそたのまし

鎌倉右大臣

侘ぬれはきみにもしるらせなれはなる山の松のみしらぬ心を

たのめねは思ひよ

續後拾遺和歌集巻第十四

戀哥四

題しらす　　躬恒

あひみても後の恋こそまさりけれたえぬものゆへはかりなき身は

堀河院の百首の歌たてまつりける時遇不逢恋

祐子内親王家紀伊

かけてたのむかひもなき人にあひみしはいつのよの夢とおもひなしてむ

典侍因香朝臣にたまはせける

近院右大臣

もろこしのあやのふもとかはらぬ心をあひみてそ猶のへにまさる

女蔵人三條すみける所のまへをわたるとて

ゆふされはかせふく御禊にたてゝ鶴のなく声せぬ濱
行く
延喜御製

濱千とせゆく末遠き松ならやまの流れくみてゆく人音にたえさき
題しらす
為道朝臣

流れてもはるかにあふ坂の関山をいとひて又あふさかとたのめ関なりけり
道洪法師

きみか代に流れしこそ昔にあふ坂の声はまてはらゝかに見えけり
藤原秀行

関の清水をそ見て暁のいて孫の影にかはされぬ袖かな
百首歌よみける時
中宮大夫師賢

いてゝ小月日数いかゆく人の影のかゝりきまゝあふ坂の関

前大納言為世
立かへりゆく流ましりてあふ坂はこえぬる宿かなりけり
逢不会恋を
前大僧正実超
袖ぬれて関の関こえてわたるまぬあふ坂の山
題しらす
あふさかの関路をいそく作そ見て出なほ行はなみたやくらん
平宣時朝臣
何ゆへに暮ゆる夜ゆる笑そよ出ふるさにいへめなりけり
藤原兼宗
みなかみの神そめの色月をみて秋見たるれとはいかにきこえさせ
文保百首歌たてまつりける時

後西園寺入道前太政大臣

あらし吹神のまへ川瀬々よりかけていかなる月をみるらん

題しらす

平貞宗

さらにまたかさねし人のおもかけをなにゝかはせん月にむかひて

百首中に

式子内親王

絶出くいふならぬわかれをなとひたちたちのこの有明の月

恋の歌中に

今出川院近衛

思きやのちの世まてとたのめしを恋しぬへくはちきりなりとは

千五百番歌合

二条院讃岐

あま雲の色なくなりにしまそらのうらみかは契なりけり

題しらす

兼好法師

定にいかなる歎のむくいにてかゝる恋路の契なりけり

読人しらす

しらぬやはたえし後の別にもあさたつ雲のかゝるなかめは

宝治百首歌めされける次に寄雲恋

後嵯峨院御製

たのめすや夜半にかはりし朝の雲はかゝる見るなれとも

恋歌とて

民部卿資宣女

涙のこ人のかたみとかはすなくらなむ袖のなきそかなしき

将忠

我せこかかはりてかゝるなりし我さむなかゝる我かはしき

宝治百首歌たてまつりし時寄風恋

身にしむも秋風ふかくなりにけり我をうらむる時しもあれは

後深草院少将内侍

恋歌中に

鎌倉右大臣

みくさの思ひのほとはかはらすも身を秋風の音にこそきけ

平時茂

消わひて露の命のなからしにあはましかは人の憐はありし

前大納言実教

契おきし露の消えせてありしにかはる人を見よとや

文保百首歌たてまつりし時

二品法親王覚助

色かはる秋の木の葉を涙にてかつかはらぬ庭そ露けき

寄柏木恋を

前参議為実

うかりける人の心の色をとか柏木の後の名のみ

恋の心を

中務卿宗尊親王

あふ坂の関ちによするさすらひてかきもちらいそ人の通ひ路

昔せしを数よりひとつまたたえぬものから松は猶

うらみ人〳〵し 須

後京極摂政前太政大臣

我のみの見えぬにたれ御しめはかけしかねて物

寄水恋といふ事を

西音法師

せきとめし心は契し抽と涙まなそこの見えなくに

嘉元百首歌たてまつりし時 逢不遇恋

贈従三位為子

さえしらぬかよひしそはなのまれまれにたえしこそひさしきつき橋

絶恋を　　後嵯峨院御製

こふかたは昔のみこそ思ひ出てと絶て年ふるくめの岩橋

東三条入道摂政かれかれになりて侍けるに絶えて後おほつかなく白かけの糸むすひてとありけれは侍りける

右近大将道綱母

かけて思ふ木もたえたり白かけ草何にかかりて宿むすふらん

文保百首哥たてまつりける時　　六条内大臣

うらみてもなほ人の契はあさえ船よせかへる波の浦風そふく

関白太政大臣

いつはりになれし契のかねことをさらにいかてかおもひたえなん

逢不会恋を　　永福門院

かきりあれはなかなかまさる契こそなかき絶とはなりそめにけれ

嘉元百首哥に忘恋　　遊義門院

契こそかはりはてぬれわすれぬはまたこそこひし世々のおもかけ

絶後待恋といふ事を　　前大納言通顕

なかなかにたえたるかたりのけふをたに絶むとてたに思ひてしかな

絶後逢恋といふ心をよませ給ける　　後二条院御製

命あらはまたあふよまてとたのみこし二たひ人の契しらるゝ

題しらす

邦省親王

たらちねの親をまもるとたのむ身は心のふとちかひさためん

源知行

恋わたる涙のいろはなへて世のうきにまかせてたえめはん

津守国助

あはれとも思ひしかひもなき袖にいまはつきぬる風のあとなり

嘉元百首歌よみ侍りける時恋歌

二品法親王覚助

忘れてもまたおもふらん涙かは我をわすれんと人をうらみて

洞院摂政家百首歌に遇不会恋

常盤井入道前太政大臣

我のみに風もや猶かよふらんこと人のあらぬそよこ方とそみれ

寄鏡恋を

源重泰

たのむ影のかはらぬ人を面を鏡にうつすあやしき影を見る

権大納言基嗣

涙のみしはしゆかしき鏡にもたのみけるなからあまりきより

宣旨典侍

またも鏡見てたのむ影はかはりてもあらぬ涙のなくうらむらん

もろかせける鏡を昔乳母のことにしけるたよりこそ

題しらす

かさねんにと思ひてみせよ向ふ鏡恋しさくへの影をうつす

弘長三年内裏百首歌よみてたてまつりける寄鏡恋

浦ちかきまつにかけてもたのめとてかへる浪のえやはみゆ哉

前大納言為氏

百首歌奉りし時

なのまつれなひくに風をまつ程の我ならにまちかねつる哉

入道前太政大臣

わかのうらうき名はたちし水鳥のなひかぬちきりすまぬ世そ

関白太政大臣

題しらす

年をへて我なにみなとこゝろつくしおなしなきさに浦風そ吹

光俊朝臣

みさこゐるすさきに人はしほ満潮のかりやくるまにわかるゝ身は

登蓮法師

女御徽子女王

わか恋は松にかゝりし住江の松とひさしくおもひわすれな

津守国夏

いまはたゝやかて江のめと無き名にも波にはにけり人をうらみの中れ

文保百首歌たてまつりし時

松山とちきりし中のなさけかてこえやおとなし浦安の浪のなをかはる

侍従隆教

恋の歌中に

恨てはすてこしものゝいはまそからる人ゆゑ涙袖ぬらすらん

藤原行明

人をこそ恨も物はいはましか我からうき一かたにぬるゝ袖哉

藤原宗秀

弘長百首歌たてまつりし寄恨恋

前大納言為家

なけきわひ恋てうらみぬとはかりの袖にあまりて涙なりけれ

歎恋涙　源清蔭朝臣

うらみてもなきこそ袖をぬらしけれさのみかはらぬあきの夜なれ

左大臣

うらむへきかたもなき世にこゝろえてかくちきりしたる葉もみえ

十首哥よみはへりし時恨恋

かはりゆく心のはなのうつろひにうらみてもなほすてぬさかりに

右兵衛督為定

元亨三年八月大覚寺殿に行幸ありて人〻題さくりて

七百首哥よみはへりし時絶恋

民部卿為藤

しめてなからあはれそのつゆ思ひもしらぬ松ひ前屋と

藤原義孝命をしらぬ世ともひつけはてしき也

本哥

読人しらす

あさはなそてをかはらぬ世とをしへかたへもしらぬやうかはれぬ

寛平御時后宮歌合に　在原元方

夏夜はすくるほとなく思ふかなあけてもしらぬ人にしのはん

恋哥中に　如願法師

うらみわひまたしいまはの身なれとも思ひなれにしゆふくれのそら

千五百番哥合に　皇太后宮大夫俊成女

夜ゝはすゝやくへのなりぬらん今はしりにし人の袖かな

寄衣恋　女蔵人万代

さ衣の中に色そへて流るさらてたにこそかれにし袖さらりて

前大納言良教

いつれとそわきもひかぬ色せくさ衣のかへしのぬれぬと袖のまさる

光明峯寺入道前摂政家の二十首歌中に

山階入道左大臣

恨ても恋ひても露そこほれける信夫の浦のくすの下風

寄山恋を

蓮性法師

いかにせむみむろの山の葛かつら絶えをうけてもかへるかな

文保百首歌たてまつりける時

津守国冬

うかりけるみむろの山の葛かつらかへりてすゑは秋風そ吹

亀山殿千首歌に恨恋

前中納言有忠

恨てもかひこそなけれ秋風の吹とかきめるそのくすのは

寳治百首歌たてまつりける時寄風恋

鷹司院帥

秋風よいかさまのまくすを吹かへしうらみはてけりいたゆる秋を

寄葛恋といふ事を

後宇多院御製

山ひとの垣ねにかゝるくすのはのかつ恨あるやとこふ人そなき

嘉元百首歌にそへ侍りしに恨恋

前大納言為世

むかし我はいはきはまりにかゝれぬる名所の玉葛かゝらん

恋乃心を　　中務卿恒明親王

枯たれの思ひのくもる袖の朽せぬ恋をまちて思ふ哉

文永五年九月十三夜白河殿乃百首合に恨不會恋

前参議隆康

いかにせむあまのもしほにぬれてふりかへても恋しきかたはうらみ

花し次　　前太政大臣

むかしより待へき物のかはしれぬ恨をみるめにつけて浮名なれ

光明峯寺入道摂政家恋十首哥合に寄細恋と

後堀河院民部卿典侍

忘れぬやあまのまとひのつりなはのたえぬ恨は猶そ絶せさ

洞院摂政家百首歌に恨恋　　従二位家隆

床はうち枕は山となりぬへしなみたとはかりも

待つの恨に

續後拾遺和歌集巻第十五

雑歌上

三條右大臣家屏風に　貫之

いさ川に老ぬる亀なり松浦の松やつるすむためしなりけん
うゑそへし緑の松の木のしたかけひさしくなりにけるかな

式部卿敦平親王

冬しらぬ千年の友と松のうへに松をかはしてつるのすむらん
契りし次

花山院御製

入江なる松の年へて浪にのみ枝も緑に苔むしてみゆ
布引の瀧の絲よりも松のしたにうきたるにはもにさよ
らふくてあはれまつりうちあはれなくに

亀山院御製
志ら糸の絶て後のためしなれや我見る川に布引の瀧
順徳院御製
題しらす
みなれ瀧の糸のあまたに落たり吹とも風のたえまをたえ
読人しらす
布引の瀧の志ら糸くりかへし流れは昔なからか
石たかき瀧津なかれのたえまにそ流れても又あはむとそ思ふ
河原左大臣家に海をつくりて塩かまをうつして侍けるに
此海を見まかりける見てよめる
業平朝臣
塩かまにいつかきにけむ朝なきに釣する舟はこゝによらなん

津の国にあしの屋をつくりて住けるに
前参議雅孝
和田の原たちゐる雲にむかひしもはやき浪路の行方なるらん
弘安百首歌たてまつりける時
民部卿資宣
わたつ海の浪の花にそ冬こもる志かの松風かけはなれ
入道二品親王覚性
海辺松といふ事を
風わたるはまのさゝ浪の松風は松に吹えは浪の音さへかはり
題しらす
平兼時
浪たかきあさしそなけは霜かれさこやかしく蘆の屋の塩風
千五百番歌合に
大納言通具

風もやゝ氷とけてはなかるらん入江のあしも春を知る哉

若菜　従三位氏久

あはれなりけりかけの袖をつみて我をみちのくにわかなつむらん

前大納言實教

はるの[illegible]ゆくへもしらすみちのくのしのふもちすりみたれそめにし

文保百首歌奉りし時　前大納言經繼

鳥の声におきされはやかて[illegible]ゆくへもしらぬ春の[illegible]

元日節會の心をよみ侍ける　音樂奏音聲雙調春

庭樂奏しける時よませ給ける

御製

時しあれは立春の声にそあきらけき近みちのくに[illegible]の庭

春哥中に　前大納言為家

さそふ山まつとも志らぬ若けりな[illegible]やこゑその鳴

前大納言為氏

いつしかに春志らぬ身とおもひつゝいまさらにうくひすの聲

寶治関白太政大臣[illegible]よみ侍けるに春日侍[illegible]

絶えてまつ日影のかけにけふに花山[illegible]野守に[illegible]

ひとりやみる春の野の雪まにそ人のこゝろ[illegible]

せりつみし[illegible]　法成寺入道前攝政太政大臣

足ひきの山雪やけさむら[illegible]

野へにいてゝわかなつむ[illegible]

中務卿具平親王

[illegible]かけりやかんかく

年へてかはらぬものをつむとせしほとふ我らの雲をけふのけ
　　御ふ春の字中に　　前大納言良教
末遠き子日の松よ引立て祝ふも千世の春やひさしき
　　梅花をよませ給ひける　朱雀院御製
梅の花風さそひけりあかつきを匂ふもゆかし人の袖のか
　　題しらす　　俊恵法師
鶯のなく声つたふ梅か枝におのれからふる雪やさえなん
　　　　　　　紀淑氏朝臣
いつしかと積し雪も梅か枝のかともあかれす春は来にけり
　　建保二年内大臣家百首歌に梅花
　　前中納言定家

春のくる月にはまつ初桜咲宿の春風そ吹
　　待花といふ事を　後光院入道前関白太政大臣
ほのかにもやまさくらさかむ山の花のさかりのむかしのことをまて
　　山家花といふ事を　為道朝臣
山ふかみてはいとゝしらぬ春をかさね野の花
　　瀧（ﾏﾏ）の滝井にはいる春の花もかさなりけりかへて後見
出る月をみて　前大僧正道昭
吉野山花や吉野にけふ此みよみ世の花をみよしのの花
　　題しらす　前中納言資賢
代々をへて雲井の花の春かとも玉の春の色をたのまん
　　前大僧正禅助

わすれみよ花にむかしの桜さへ今もみちよの花やさかさらん

二條院讃岐

さくらさく我かふるさとの花のかほりはむかしのはるとはみえず

藤原景綱

しき世のむかしにかへる道あるは人の心一つにわかれて花もさかりて

従三位氏成

我やとりけるもとかへり世にしき世の花ふる春の風そふく

文保百首歌たてまつりける時

関白太政大臣

いにしへの春の花を見るにつけてもいまやうき宿の花ちるを

春歌の中に

二品法親王覚助

いかにせむ秋の月にも心をかけて花ちるはるの夢のむかしを

後宇多院より百首歌たてまつりける時

前大納言為世

老の身は春やむかしの友と見ん花のさかりのむかしそ花の月影

亀山殿七百首歌合に花前懐旧

後宇多院御製

世をすててふるさと人のむかしにかへるやうなる花ちるなる

民部卿為藤頭にてはへりける時の事思ひ出て

きのふけふみぬめにうかぶ花の下にもれかかる

権大僧都公順

ゆくまであかぬなかめにむかしの花の春も花をみるかな

民部卿為藤

いはふ心をかけよ春日山おほくの藤の

賀をよみ侍る　　前大納言基良

なかへ侍る世にあひてかけて見しうゑぬ柳の

惟宗忠秀

あはれとは神も見るらむ世のあひまにかさなる[illegible]

山家郭公を　　菅原在良朝臣

杣人も川ともしちのを山ふかくすみ[illegible]

元亨三年後宇多院十首歌めされける時祝

祝　　権中納言公明

位山のぼりてさけば[illegible]

和歌所にて釈阿に九十賀給はせける時屏風に

宜秋門院丹後

郭公なくねの山[illegible]なりなまし若菜つむとやめく

けるとよめる　　小弁

このひかりをまちし松[illegible]

平義政

けるをよめる[illegible]

五月雨を　　賀茂基久

さみだれは[illegible]

読人しらず

[illegible]

邦省親王家五十首歌に

鴨社夏

五月雨は岸ねをみちぬうの花の玉川あさき瀬も
流てしら浪こそ残れ一人の影むすふ月たに
にあらそふ夏のよはふけてかはるゆふ風のかけて雲ゐ

よみ人しらす

何事もすなほに流てきみか郡なき代のためにとこそ祈れ

夏哥中に

照念院入道前関白太政大臣

いさらゐのあまりの色にまつ夏の風の衣はきのふの秋をかねしらぬかな

述懐百首の哥の中に氷室

皇太后宮大夫俊成

うき世のはてそ残るひむろのたねやせめて一つなりともなからむ

題しらす

藤原頼氏

神かきに露のかゝる色にさそふ萩の葉の色やうつろはむ

光明峯寺入道前摂政家秋二十首哥に

藻壁門院少将

さかきはのゆふかけ山の神かきの上にかゝる露は玉やかさねん

寛元百首歌奉ける時秋哥

法印定為

神かきの月をもこゝにすみのえの松の葉

題しらす

よみ人しらす

秋されはあきの色に露の空にて我をやまつとはやくゆくらむ

文永八年七月七日白河殿にて人々題をさくりて哥

くさまくらたに　後嵯峨院御製
すゞ虫の袖にも秋やなりぬらんさき枝にさける萩原
題しらず　読人不知
峰たかみ夕日さす影そかゝれるにかけてかくれぬ山のはもや
新院御製
いはねふむ夜ころに霧たつ林霧のたえまに駒ぞ見えける
土御門院御製
七夕の林の出るひかりの月をはなれし岩の月夜かな
山里はたゞ月をのみそらの
小町
やまさとにあれたる宿をてらしつゝいく世へぬらん秋の月かけ

中宮にてよそ行このほとの御影のたへなる夜
たにこそ今宵は見えんと思ひ侍りける
二品法親王慈道
霧はれて峰のみ山の月影はさやかにてらすその夜の月
前大納言定房家にて八月十五夜のうた
月
いつくの林を出てさしのほる秋の月は影もくもらし
権律師浄弁
題しらず
こゝろなき海のあまをとめ袖の月影
津守棟国
前大納言為世家歌合に
津守国助
志賀のからさきのさゝなみに秋の夜の月のさやけき

月の歌とてよめる　藤原親継

山里の月のかけにや秋の色時雨もそめぬ紅葉なりけり

月前草と云事を　信実朝臣

かさねても月やいかにと見えぬらん草の若葉の秋のしら露

題しらず　土御門院御製

嵐山のいりしらぬ岩井の水もとも色そめて秋の錦をそへて

題しらず　よみ人しらず

遠山の嵐にかつ楢の葉をみねの杉うと紅葉すれ

大江宗秀

うすくこき色をやわきて深山の時雨も露も松の楢を

わけ入て見たりふくかつらの錦まゝ人からおりてけり

おもひの侍りける頃吉野山にまかりとまれ

たちよりける　山田法師

このもとの紅葉は深山に侍りけん人の我も嵐をぞ吹けき

題しらず　基俊

むらくもの霧のまがきにさそはれて立ちとまる秋かな

文保百首歌たてまつりける時　後西園寺入道前太政大臣

ほのかなる山かけの夕時雨にあさそめて年を

題しらず　忠見

神無月待つには外の世の中にはかの涙をこそこほれなりけり

嘉元百首歌奉りける時時雨

権中納言公雄

神代より流たえせぬみもすそのきよき心に時をまつかな

題しらす　伏見院御製

神のすゑなるにわか時のをを我世にうけつたへてひかり

藤原高光朝臣

もろ人ものいはて千代ときみをいのるかな　安法法師

いつとても世々のみかけはたえせぬも木葉ちる比

建保五年内裏歌合に冬河風　皇太后宮大夫俊成女

橋姫のかたしく袖もむすほほれさむき霜夜のうちの川風

題しらす　式子内親王

あさひさすむらの杉を霜をまちてかれゆく月かな　輔仁親王

かたをかの浅茅に露をおきそへてなにとおもひの庭　信實朝臣

雲まさる日のかけは雲に成にけりさても枯ゆくかたみなるらむ

弘安九年宇治橋供養日亀山院御幸ありけるに　後光明照院入道前関白太政大臣

雪とふる花の錦はいかなれは

ゆくすゑを海とみるたにかなしきにうきの江をあはれ

題しらす　前大僧正隆弁

清くにこかすわたになかるゝ白雲のゆふつかたなるさゝなみ

藤原基明

いかて小倉をれる松といはひてえまうすかしのめ年せ給に

山階入道左大臣

住よしの小松もともにあひおひのそてらぬ年のさかえをそ見る

弘安百首歌奉りし時

前右兵衛督為教

ゆふくれに浜の色こそ昔にくらへて年もかはらぬ

弘長百首歌たてまつりし時

常盤井入道太政大臣

松ともにあらはれてやく言葉にのこる花と月とそ

ちとせあせてさらに

続後拾遺和歌集巻第十六

雑歌中

題しらす

土御門院御製

しつみにもつみうかふへき世の空にすみけり月やしるらん

前中納言定家

年へつゝなかめしをくらのかけにもかはらぬ峰の秋の月

殷富門院大輔

うき世をはなれさめぬる侍らぬ世も物うかる秋の月

長恨哥の心をよみ侍けるに

道命法師

おもひきや都の雲の上にてもこゝろそらなる月をみんとは

清少納言清水にこもりて侍けるに月いとあかき夜

申つかはしける

法成寺入道前摂政太政大臣

おもひきや山のあなたに君をおきてひとり都の月をみむとは

弘安百首哥たてまつりける時

式乾門院御匣

秋をへて老となりぬまてなれぬる月よりほかのおもひ出そなき

題しらす

平宣時朝臣

いかはかりおもひしらるゝ暁のねさめは老のなみたなりけり

菅原孝標女

竹の葉にそよく夜ことにねさめしてなにともなきにものそかなしき

文集草堂深鎖白雲間といふ心を

土御門院御製

若葉さす草のいほりのねさめにはきこゆやのとけゆくみ月

逕経苔を　伏見院御製

住なれて猶ひとりすむ山かけはとはれぬ庭の苔ふかきみち

大峯へとて住侍る　大僧正行尊

山ふかみ我おもへはえいてゝそ人も世中はおもりはてぬまゝに

題しらす　源長俊朝臣

世中のおもひつるうき山里はいこそれかとのたよりなりけり

寂蓮法師

山ふかくすむはこゝろのとやいふ人のなへにまかせぬ人をたのむらん

百首歌の中に　式子内親王

さひしさはなれぬるまゝの柚そえて峯の松風いまくれにこそ秋の木の下

弘長百首歌奉りける時山家　前大納言為氏

里とをきかけひの水のたよりにてこゝろとめぬるうき世なりけり

宝治百首歌奉りける時山家水　前大納言為家

なからへて山かけのいほりむすふとはせてたよりなる岩井の水

文保百首歌奉りける時　権中納言公雄

かくてこそおもひすて川まてもくる山住の命のありてうき世を

山家の心を　前大僧正良信

いとひ入山路の松のみすかにかへるあとはいさやこたへむ

藤原重經

うき世とはすてゝきこそはいりしかとなを世のうき山にちかき小

惟宗忠景

山里にいりし後の世てもいらましものをとなくなるおもひかは

前大僧正道玄日吉社にて人々にすゝめ侍りける五十首の哥の中に

源兼氏朝臣

うき身をはみるへき山もすまぬものなれはなけきそひく宿

貞治百首哥たてまつりけるに

従三位成實

いにしへもむかしなからはかはらすかはりて松木の松は年をへぬらん

述懐の心を

高階宗成朝臣

おなしくは昔の松にかそへてもなとかはとはなきなからむ

かりし世のむかしのいさゐの中にはかなくとなけれはけれと

前大納言為氏

前大納言為世

ことわりに二つの道をふかくそ世にはゆるさしと家のかたりけれ

前大納言為世よませ侍し春日社卅首哥中に

民部卿為藤

何ひとつ昔にかへるそかきとは浦のこゝろや絶ぬらん

百首哥奉りし時

前大納言經継

ちりかゝる葉かれのつめはいかにしてむかしの名の数なくさらむ

題しらす　　　平貞直

かひなきはわかの浦波たちかへり跡まてさへや思ひしらせん

源高氏

かすならぬ身はうき川なりとさしひかれてこそ和哥の浦浪

藤原範秀

数ならぬ身はいかにすともわかの浦の波にひかれて名をやかけまし

大江高廣

しら浪のかゝる恵をしらてそいたつらにぬれし和哥の浦舟

侍従隆教

うきにのみ袖はぬるとも世にしつむ跡はのこせよ和哥の浦波

前中納言定資

古の跡とたのめはわかの浦千鳥何ゆゑにかくなきわたるらん

法眼源兼わかつてひとつ侍ける時相傳の文書をそへて

ゆつりてつかはし侍とて　　　法眼行済

和哥の浦やたゝにかへらん住吉の神のちかひをゆるさぬかみのまもりに

返し　　　法眼源兼

わかたの世にはゆつるとも跡はしもわすれす忍へ和哥の浦風

題しらす　　　藤原長遠

和哥の浦や雲井をしらぬあしたつやおほへなくなきわたるらん

亀山殿にて七百首哥講せられける時権中納

言公雄まいりて侍けるを後日につかはしける

丹波忠守朝臣

いは浦に世の戦ハかさねつる其乃波まてたちハ川の底を見き

題しらす　　法印隆淵

おかくて川をわたるとしらすしもこの世乃渡りをとは

法眼慶融

松ひかきとのわか世に来とたに志らぬ人かとのなかに見ゆ

僧都遍救戒をあつらへて侍りけるとき読侍ける

末乃世になりはてにけるいにしへもむかしの人の心にならむとも

藤原高光

外記廳結政座にて古文の夜廃の海にならむことを

さはかりことをいひつたへにけるかな

中原師光朝臣

任ねしへのなき人の数の宮にたてまつる松のゆくへ

天平勝宝四年聖武天皇左大臣家にみゆきし給ひけるとき　　井手左大臣

むくらはふいやしき宿も大君のまさんとしらは玉しかましを

うちの名所を三首三首詠ませ給ひける中に朝草

花　　御製

露ならす猶しもおくは萩の戸のあさちはいつもあさまかりける

貫之かこのたにかへて讀侍ける

源宗于朝臣

君ひとりかこれぬかぬや我宿の庭を露ときて成ぬらむ也

いまさらにやとのしつはぬ人の春の匂ひにけり

まつ人とたえすつれなき山ゆへにふかせよとたにたえぬもの人

西院皇后宮

ことしの六月令の勅使にて二十日ひのほりて帰りけるにかきつけ侍る

光俊朝臣

おもひいてよ年のいくとせをへてふたゝひかへる麓の白雲

前信濃守云朝

題しらす

花かつみもなかの露をきりてこそむかしの心ぬれしもの

平宗直

たに川も山もとしもの霧やもれぬらん袖にそれぬへきおもひの種

式部卿久明親王

夢ならぬ猶たに川袖にてそ里のあたりもはるかなる夢おもひの告

読人不知

侍るにいさむ月なきさまの雲の山風たにおもひ侍らぬ夕くれの空

前大納言俊光女

風わたる窓のまへ竹うつ枕にもたえぬよそよのなき秋のよは

前中納言為方

寄竹述懐

かくたに秋の夜ふかくそわたるまくら山の里の宿の竹

あはれ百とせを今そさゝけはる時代

二品法親王覚助

うき枕にこゝろかよふあはれぬる竹のことのはにしけき世にすみ

題不知

藤原為顕

みちのくの心に袖もからぬこほれうきすゝきかそこにしけき

山里にゆきかふ人のあとたえて何けるも雪に

右近大将道綱母

すみよしのかくなる瀧をたのめともいつくかためのあはれつきぬ

題しらす

大江千里

都まて浪まちくらし人とも哉わかしらすをわか身志川もなん

前大納言俊光

数ならぬ身なりゆくすゑをおもひきや松のうらかけになみそふ

安嘉門院大弐

あはれとも何とおもひみよもすからしらすしも川のあはれ

藤原興風

しら波をわけかけあまの漕舟に命かけつゝ見ゆるなかりける

寄船述懐を

いかにせむよるへもしらぬあまを舟うき世の波にたゝよひそふ

談天門院

伏見院御製

うき川に世をわたりつゝ見る浮舟の行末しらぬ身のはかなさ

前僧正道性

よをうみにみをすてはてゝこきいてゝも世をいとひつゝ

永福門院内侍

浅き瀬にうかひてうかふ川舟のうきてゆくらんおもひさためて

述懐百首歌よみ侍けるに

皇太后宮大夫俊成

五月川瀬にかゝるいかた舟の志らすそたにも都に舟なる

嘉元百首歌奉りける時松を

前左大臣

君か代にあふ大井川のわたし舟むかしの跡はなほしられけれ

題しらす　　藤原貞忠

名とり河いかにせよとかあさきせにもれそめにけむもとの心は

性助法親王家五十首歌に

後西園寺入道前太政大臣

冬の色ねみえぬときはの山のまつをとはこのせをきかぬ年の大井川

文保百首歌奉りける時

前参議為實

流れ色あらし吹くる中山ほとゝきす鳴そえ空の藤河

入道前太政大臣

ゆく水のあはれとおもへつらゆきし河流のきよき大井川

関白太政大臣

家の風吹きぬなるかせと君か代は河もかはらすたえぬ和歌浪

前中納言定家卿例にまかせて為忠卿以下松亭

つきしを民部卿為藤中納言にうつりてよろこひ申ける

前関白左大臣

任かへの峰の紀の葉のあかれぬはさむかしにかへりける中河の水

返し

民部卿為藤

いにしへもかくやむかしの中河のきえぬ流の跡をしるらむ

かゝりしをふりすてかたき代をもあけての監の命婦より

たとへなくむかしを思ひて久しくもなりにけるかな

良季宗貞

あら人のたえぬあたりの花の色のかはらぬ代にやとるらむ
わたしもりよわたりはきりふた日へぬりとこそきかぬかともてうれ
侍けれは　清原元輔
あさかはにわかひそめて衣川かねて世にこそ袖をぬらしつれ
うちかへしきかぬを高安またいとゝうたゝねに
大納言経信
我きかぬ人のすゝむるはかりあひそすることこそとりならぬあ
藤原顕輔朝臣に侍時家の歌会かて僧にかわりて
うち扇のうちにしたくたりてまかり　読人しらす
いにしへは数そかきあひける山あひの衣かさねて日ぬれしは

前中納言定家出家の後百首よみてまいらせける時
西園寺入道前太政大臣
おもひ川や昔の人のなかさなるゝとていかなるたにやかゝる
なゝ
前中納言定家
読てまつるとてなからへきたりける白きのかへしにとて
昇殿ゆるされけるによりけるついてに読てまいる
三百首の中に
正三位頼氏
あまつ風雲のかよひ路吹とちよをとめのすかたしはしとゝめん
千五百番歌合に
前大納言兼宗
くものおなしく中の世にかはりなく人のかくれかの山さ
題しらす
左近中将具氏

たくひなくこれより我そまけつしまあとを捨ぬ代々のあとは

寛元百首歌たてまつりける時述懐

従三位為信

うきことは源の家は我身にあまりて世々にかけ

前大納言資教

をさまれる世をすてぬ我君の代ともそなのめならぬ

百首歌奉りし時　前大納言定房

一もとのへともなく思ふ心川すたへたるのとくにとこそ

御製

世をさまれる民やすきの世といのるそ我方につきぬ思ひなれ

文永八年白河殿にて人々題をさくりて歌つかうまつりけるに

宮の清井てに

後光厳院御製

ゆくにへる橘をうけ見る世のかはりをさまれ

古縁清くす

續後拾遺和歌集巻第十七

雜哥下

百首歌たてまつりし時　関白太政大臣

きのふまて世の猶覚に杉のいてく後もむかしなりけり

題しらす　後宇多院御製

むかしこそ恋しき事はなけれとも世の猶覚に杉のいてゝ

嘉元百首歌めしける時井手(?)河

かはつなく井手の川かせたえすしてふるきを波の昔の道そある

懐旧の心を　前大納言為家

さそな猶昔にかへるためしをも縄(?)かけてしのふ

法印定為

よそにしも昔はかはらぬ心のみすゝにまさる月日のうつりゆくかな

亀山殿の七百首歌に懐旧といふ事を　権中納言公雄

身にしめて昔はいかに思ひ出の数そへてこそ我もおいぬる

老後懐旧といふ心をよめる　津守国助女

いにしへを志のふ思ひのなかにひとりそとおもふこゝろのうれしき

百首歌奉りし時　二品法親王覚助

ひとりこそ志のふならひのおなし世に思ひてよの心やともなむ

題しらす　法印良宗

なりひらのたえにしあとのいにしへを衰(?)をかなし昔なからの人

おもひあまりねぬ夜の数にあまるかなさても世にやこひしかるらん

平宣時朝臣

なからへて我もむかしをしのふへきにむかしのおもひをたれかしらまし

前参議雅孝

思ひいる我世のかけもむかしにてしのふにたえし山の端の月

藤原秀茂

山階入道前左大臣家十首歌に懐旧

みしかよの宿のむかしをしのふにもこのよのみかは物そかなしき

前大納言為氏

おもひいてを

前大納言為世

君か世をかさねていまやおもひいてしのふるむかしの昔なりけり

文保百首歌たてまつりける時

めくりあふ月日はおなしむかしにておもひいてそむかしなりける

前権僧正雲雅

いにしへをたのむ月日をてらしてもむかしかはらぬ世の中はけ

藤原秀賢

おもひ出てしのふなみたのひとつにも世をなけくへきむかしなりけり

続誉法師

おもひいつる道こそなけれ人もたえしのふ昔にけふもくれぬる

源光行

普光園入道前関白家十五首に旧懐旧といふことを

源兼氏朝臣

月は見し我身の老いとなりにけれ昔のまゝの影をかはさて

後宇多院に月五十首歌たてまつりける時

民部卿為藤

なほひかりくもりし月そくまなきをむかしや神の誓なるらし

文保百首歌たてまつりける時

二品法親王覚助

こゝろ比の老の涙のせきもなく玉ぬくふは若葉なりけり

旧枕故衾誰与共といふ心を

前大僧正慈鎮

いにしへもかさねし袖のかたしきて涙ならてはまくらなりけり

題しらず

藤原基夏

何にせん枕かはさぬ池水のうきねの鴛鴦に似たる身ならは

後光明峯寺前摂政左大臣

みなそこもむかしの鏡の影にたに面影さへ残るなれは

弘安百首歌たてまつりけるとき

大蔵卿隆博

かくしつゝ年のをはりもむかしてふことのはにつけてこそやなけかん

前右兵衛督為教

いきて世にいさのうきは何となけくらん杖かはらぬ人の数なる身を

題しらず

津守国助

ともしてはほとなき物は命なりむかしまてこそいはぬ也定

成尋法師母

なからへて身はうきものゝ後の世にたのむ人とはいかてしられむ
憂にわかれて法の世の中はなからへて[illegible]
法眼行済妹
昭慶門院源
なからへてなれしも河の[illegible]ふかくてむすふ[illegible]
身をうらみてたのみける
読人しらす
なにとあるみのゆくすゑもおもほえてやなくさめてたゝ世をすさん
一すちにおもひさためてなけきても[illegible]
題しらす
邦省親王
行すゑをたのむ[illegible]にもなくさまてうき[illegible]
権僧正慈慶
朽はてゝ名のみなからの橋柱いかてかわたる[illegible]
いまはた世をもふりにけるかな
亀山院御製
さてもけになからの橋のなからへて世をわたるへき[illegible]
述懐歌とて
中務卿宗尊親王
世中のうきにうきそふ[illegible]
読人しらす
うかりける世にきえてそ[illegible]山里に世をいとふ[illegible]
寄山述懐を
前大僧正良覚
我身こそ[illegible]

山の家にて十首歌よみ侍りけるに月前述懐

後西園寺入道前太政大臣

おりゐてかへる山路の月をみてうき世のかたもおもひ出哉

題しらす　寂蓮法師

住わひぬいつは我をかくれなむ世にはうき事あらしの山の奥

好忠

あはれ世はいとふなかにもいとはれて世中に我身ひとつの住ゐならはや

よみ人しらす

そむくとて入ぬる道は行末もあるそてうき世のなをさそはれし

前大納言為家

うしと思ふ身のとかりにすてしよりなほすてかたき世のむくひ哉

覚瑜法師

数ならぬ身をいとひてもいかならんかひなき世のならひかなしさは

弘安百首歌たてまつりける時

二品法親王性助

うき世とはいへともあれど心からひかれてすくる身をいかにせむ

法印定為

いとへともいは後そうらやましいたつらに世をすくしつゝ

題しらす　藤原長経

身ひとつのうきにつけてもかなしきは世をすてかねしこゝろなりけれ

祝部行氏

一すちにおもひいれぬ心からそれともなくてそむきかねぬる世をすてかねて

藤原泰宗
一とせはよう哉世をいそてもそむき世になほ世はうすみ聴

平行氏
たちあはぬ名残はかりにあはれなる身をおもふそ世をなけける

永尊法師
捨たりし人そすむなる身をなけき世を恨つゝなほひとりかも

大江廣茂
いとふ色さらに世とそけにみやこへの捨ぬわりひとつ身はたゝ知ぬく

寿暁法師
捨屋ぬる心そみかへ中々にいふかひなき身をへかゝし

源宗氏
思ひしる心のなきにあらねとも身のうき世こそ捨かたけれ

弘安百首奉たてまつりし時
安嘉門院四條
なにことをおもひしらぬ心にて身をすてゝいかてか世をはのかれん

述懐の心を
権少僧都良性
されは世にあるへき物を中々にいふかひなくもしつみはてぬる

法印長舜
なけりしと捨ぬ心のうきをみつさてもこの世に身の嘆なりけり

禅心法師
こゝろをはかはりゆかはなる嘆かなと思ふ身ならはなけくともなし

従二位経尹

何とまた志らぬ浪のさゝきにつけてはやき川に流れん

入道親王

うき事は身にそふ物と思ひしをたれ世をすてゝかゝるうきめも

文保百首歌たてまつりける時

此ほどはよしや身をすてあらむ世をはいとひて後そ思はめ

権中納言公雄

題不知

いかにしてうき世をうきものと思ひしにそむきはてぬの身をおもひけり

読人志らず

のかれてもうき事は数そまさりける世をうらみてもかひなかりけり

法印円伊

頓阿法師

いかにかくうき身を捨てかけくるも捨しまたふかき山へ入りけむ

むかし世を捨かねし心のうちおもひつゝもそむきけむ

藤原盛徳

うき身をばすてゝいかにの所にてたれゆへかぬる袖やぬらさん

行念法師

身をばすてゝ世のうき事をしのぶれとおもひさためす墨染の袖

宰相典侍

世をそむきて後九月尽に寂しきことの葉をそへ

のこりつゝ侍けるに

修明門院大弐

露ふかき秋の野原を分けてこそ草の花ならぬ袖の色にそへける

宜秋門院丹後かもとへ出家して後九月尽日後京極摂政のもとよ

題しらず

前大僧正慈鎮

家を出し道えらせきたまへのうへにはたゞ露の袖やまくらん
よし

後京極摂政前太政大臣

よもすてゆくも袖にそれかけしまにれそ海を見ゆるまの露
風まかせ宿りひとすちそこたり何はまにそれらし
人の世は夢さかりを残後のたえいてつかゝめ世のはかなき
なきたい海さにおもひ志られてもある

仁和寺二品法親王守覚

海をふく風も残い志てたえ秋の夢の夢は見えと思ひけれ
思ひ侍

見し人志る侍

わりと見となのむつけてたえの秋の我もまとおもひ秋の夢

源季廣

うつゝ秋のかたみ海てえ見え清ら我夢はらつに秋けさ清らの

嘉元百首歌たてまつりける時

津守國冬

おもひねのなかきに夢はさ川うらそなけくかひもなきまゝ

贈従三位為子

かつきえて袖そぬらしてわたりぬる人しらぬみゆの夢のうき橋

亭子院長恨歌御屏風に

伊勢

玉すだれあくるもしらずねしものを夢にも見しとおもひかけきや

世のつねなき事をおもひてよめる

読人志らす

仮にすむ夢は浮世の覚めやらて我身の世にもあらまほしけん

中臣祐春

たとふへきものゝいかなるん此世はかりを夢にありて見え

山階入道左大臣家十首歌に寄夢述懐

源兼氏朝臣

うき事をさらにや夢と思ふなきはまことはうつゝにやあらん

題しらす

覚誉

夢の中は夢もうつゝも夢なれはさめぬは夢もうつゝ成せ

僧正聖尋母

うつゝとてそれかつてのひとなき夢より夢に似たるうき世なりけん

権大僧都浄道

見てもまたあるかうつゝを思ふにも我夢は昔なりけり

入道前右大臣

うつゝやはいかにもさめて夢の世にねふりはさめぬ我身なりけん

往事似夢といふ事を

普光園入道前関白左大臣

思ふ事を思ひ川きえ行きし事をうつゝの夢とたのみける

為道朝臣

たのむへきうつゝとたのむ我思ふかくの夢にかはりて

續後拾遺和歌集巻第十八

哀傷哥

題しらす　　中務卿宗尊親王

人の世はなかれてはやき山河の岩まにめくるあはれいつまて

大納言師氏

此世には又浮くたらふたらのまゝ消ぬまにかゝる命

源重之

糸乃ゝ色すら絶ていつあき風のとりに秋分に消や庵

従二位家隆をとめ侍りける哥中に吾妻を

正三位知家

人の世はたえてむなしき夕煙となりて立空に消ゆくゝ

題しらす　　菅原陳経女

とりへ山たちし煙を[illegible]
きのふ[illegible]人のかたみに[illegible]

　　藤原高光

なのこりとみし人の山をなかめても[illegible]かすみてもきみ[illegible]

讃岐守になりて侍りて後の春雨のふりけるに読る

　　菅原義孝

春雨の時よりさらに世中にふりはてぬるもわかれこそさ

世中のあはれなる事を思ひて

　　太宰大弐高遠

時ならぬ我身の春にあひぬれは風まつ花の心ちこそすれ

上総[illegible]

　　堀河院中宮

[illegible]

為道朝臣身まかりて後五月五日贈従三位為子かもとに
申つかはしける

　　権中納言公宗母

きく涙袖はてぬそのあやめ草引わかれにしそのねのこる[illegible]

返し

　　贈従三位為子

あやめ草引わかれにしそのねをもなくにそ我身をそ根の

萩[illegible]家にて風の吹侍りけるに世中はかなき事を

[illegible]所にて

　　増基法師

いふかたもなく風にみたるる萩のえたすゑの露にまかせぬる身を

観身岸額離根草といへる事を初にて人々よミける
哥の中に　　　　　　和泉式部

露をみて草葉の上と思しは時まつ間の命なりけり

題しらす　　　　　読人しらす

朝露は消のこりてもありぬへし誰かこの世に残りはつへき

大江匡衡朝臣身まかりて後石山へまうてゝ侍るに
はかなき草の露に朝日のさしけるを見て
　　　　　　　　　赤染衛門

朝日さす山辺て露のきゆるまもみかくるゝかりけり

贈従三位為子身まかりての日民部卿為藤もとめける
哥の中に月前思故人といふ事を
　　　　　　　　　従三位為理

なれし世のかけを偲ひてやあまるらむ秋の比の袖の露けき

祖母身まかりて法性寺なる所にをさめ侍りける
をみてよみ侍る　　　隆信朝臣

すみのほる月を煙によそへてもやかてけふりの末そかなしき

七月の十五夜に京極院の池に月のうつりて見えしを
思ひ出て読侍る　　山本入道前太政大臣

光そふ瀬々の川波いにしへにかはらぬ月の影をたにみむ

母の思ひに侍りける時前栽の景物をとにかく侍りて
　　　　　　　　　前大僧正禅助

わかぬ秋の夜の枕いかならむ松虫の声の露けかるらむ

題しらず　　藤原景綱

なほよをそむきての枕に露まさりて夜はとりあへぬ涙なりけり
あはれとも人やとひ待まつ時ならむ

安嘉門院大弐

あさたのゝ清水に露のゆかりとて昔にかはるなきかけもなし

前大僧正守誉身まかりて後よみ侍りける

純誉法師

草のはにおきそたのめし露の身はかせのまへなるならひなりけり

題しらず　　前中納言為相

消えかへる草葉におけるそのきえぬまはいとひしことのあはれなりける

伏見院かくれさせ給ての比時雨ふりけるにまかり侍りて

言の葉

院御製

露しけき秋の枕のなみたにもまつこそしたへ袖のしつくを

題しらす　　惟高親王

まてしはし河せにたつる宿もなきかれ野の露もこぼれぬるかも

後嵯峨院大納言典侍母身まかりての比

九条左大臣女

おもひやるこゝろの露もかはく間なく涙の袖の色そ深しき

父の見えぬ比あき山ふりて侍りける時よめる

まつ世経る

女御徽子女王

とふ人もいかにしのふの墨染の衣の袖にいつもかはらぬ

近衛関白身まかりて後寄衣述懐といふことを

高階宗成朝臣

形見そとゝる袖のかはりけり誰ゆへなれは墨染の袖

義福門院かくれさせ給て後御忌日に補絹經供養に
て参議親隆もとへいひをくり侍る

皇太后宮大夫俊成

墨染の袖は涙にひまなくてさめ白露のきえそふ秋哉

あひしりて侍ける人のみまかりて侍けるころ

高陽院木綿四手

契りおきし玉つきれぬかなしさはたていとひ度かきりある哉

神無月廿日あまりの比義作三位にひかはして侍けるに
つかはしける

周防内侍

いやむしろの菊たにたちかへりつる此わかれ
まちみめくるたとこのとせさ国にてなくなりぬと聞て

よみ人しらす

消えむとは思ひて別し志かとなほなき世をきけはいとゝ悲しき

あひしりて侍ける人のあつまへまかりてのちのたより
宮つかへ京にくたりなりにまかりて後かれかおともこたえぬ
くらひとしてしか侍りける

信生法師

なれ〳〵の月ややかぬる後の世のやすらふ岩闇をいてもと見
ありまかく尾まてひとりまゐりける時によめる

藤原雅顕

おもひきや別りしまゝにめくりあひて又此世の月を見むとは

贈従三位為子身まかりて後前大納言為世卿許へつかはしける

前僧正道性

おもひやれ人にをくれしなけきにもひとりさへぬる床の涙を

返し

前大納言為世

さきたちて消ぬる露の命にもをくれてのこる身をいかにせん

千首歌よみ侍りけるに

後宇多院御製

みし人の別はをくれさきたつの命にかはる月日なりけん

歓喜園摂政身まかりて後九月はかりよみ侍ける

後光明照院入道前関白太政大臣

めくりきてはなの枝をかたみにてしのふ木のもとにおくれん

身まかりて侍ける人のそのひによみ侍る

よみ人志らず

別れても月日にめくりあひてける命はいつまてかは

少将か世をはやくの比よみ侍る

九条右大臣

あけくれて月日のすきはかはるとも涙のや海となるらん

戒仙法師身まかりてのち権中納言敦忠によみ侍る

いひ遣ける

貫之

あまたゝひすきて今はと思ふにも此世中に夢ぞありける

従一位顕子身まかりて後前右大臣…

と申て侍りける　前大僧正慈圓

覚めぬ夢ちよ夢を思ひて御ものの中にかへる旅ね

家の百首歌の中に世をいとひけるとて

中務卿宗尊親王

いかにしてしひてはやめん今は浮世と夢をもたのみに元世なから

題しらす

世中は夢ぞとふかくけさてなほまされぬるの夢をさむる折は

前大納言為氏

西行法師

なにこともかはりゆく世中にうつゝの夢のさめぬはかなさ

西行法師すゝめてよませ侍りける百首歌の中に

前中納言定家

世中はたゞ新風にとにかくにみるをあはれと

なをむつきかは

續後拾遺和歌集巻第十九

釋教哥

題しらす　　前大僧正慈鎮

法の門はなをよそにてありしかなきくう哉世をはいつかいとはむ

山寺に篭りて侍けるに法師のいとたうとく経よみけるをきゝて　　和泉式部

物をのみおもひの家を出てこそのとかに法のこゑもきゝけれ

嘉元百首歌奉りける時釋教　　前大僧正道玄

立る色のおほろのうちのひま出ぬ月のくまなき人のこゝろに

題不知　　中務卿宗尊親王

ゆくりとそ西のかたに思ひおきてねかふ身なりけれ

三界唯一心を　　選子内親王

かくはかり人の心にまかせてそ仏の道をもとめかゝれ

久安百首歌に　　皇太后宮大夫俊成

たれもみなしらぬひまつれ法の花ゆへいとゝ世におさまるなり

源家長朝臣すゝめ侍ける一品経の哥中に序品　　前大納言為家

雨さそふ嵐のちりし梅の花はみ法花雨のためなりけり

是法住法位世間相常住の心を　　行然上人

谷の戸はかくれぬ色そなかりける春の色とて折しる梅かえ

十如是の心をよみ侍りける中に如是報

後京極摂政前太政大臣

うき我を世をもやはらく成かさねむくひにひかれきし此のはか

信解品　　前大僧正實超

たれくそれとあけくれ家のかりそめに芥草の枕なり

薬草喩品　　僧都源信

おなしくは一味の雨にうるほひて草木も人も仏とそなる

法師品　　選子内親王

守すらんそ心のとけきさ夜中にありぬる月の光成ぬを

則如仏現在を　　大蔵卿隆将

雲えぬ夜霧にはれたるやしのかへそさやけき月の光なりけれ

不軽品　　前大僧正道昭

冬枯の梢はなかなかたのもしくさかりそこの花も紅葉を

妙音品　　堀河右大臣

しつかにも空にきかまくと思ふ世は聞をせかおなしを掛まく

厳王品　　法印憲實

さとませしもとのかならずおなじ木のした家のいそ深き

祝部成仲

たちかへる世にも此道すゝめてそ岸はいはるかにわたるらん

花しく浪　　前大僧正観源

ありひとつ心ひとつの光とそやみをもはらふしるへなるらん

釈教哥とて　　津守国道

とく捨世ハ中々にひさかたの雲井はるけき法の道芝

法印道我

大日経住心品秘密主自心尋求菩提及一切智何故本性清浄故の心を

尋きて花にそれとあらはれぬ松のみとりも春風そ吹

法印正恵

如實知自身心を

花の色霞にひかりをまかせつゝもとより法の月やとる覧

前権僧正定顕

阿字観を

うたかひて今そ知ぬるあたらしき法のなき世は法の海となる道

前僧正公朝

不妄語戒を

身の中にたゝひとつの事をまつ見ゆる思ひの道の一声なるらん

権僧正聖尊

津の国のなにはの事もいつはらぬ後の世かけてまことをそきけ

又河らひ給ひける比寂照上人にあひて戒うけけるにかはりけるは

三條院女蔵人左近

たのみつる法の庭にはいりぬれと戒さへさえてくもらぬ月の影

十戒頌讃侍りけるに

寂然法師

まもるへきいましめのみをまもりつゝむかしをすくる月の影

文保百首歌たてまつりける時

二品親王覚助

きよかりし人の中にはまもりけむやみゆく月のまよひをは

浄妙寺入道前太政大臣

てる月は心のそらにある物をなにとて空のくもにみゆらん

道基法師

ゆらひかしの庵をならにたけめそちとる月を出けさ

前大僧正良信

おもひとれは世のなかひとをはかなしと月のさはりたえてみる

金剛般若経如来者無所従来亦無所去といふ心を

法印守禅

いかるとも入ことはみえてありあけの山のはにのみすめる月かけ

無上菩提誓願証と　千観法師

山たかみふかくれし月をとゝめても我身のたなとおもふかな

題しらす　基俊

さやけしな山の雪や晴ぬらんかみの山ちすてゝ月をみる

久安百首歌に　上西門院兵衛

西の空のむかへりけるをとえいのかこに樹をむすらん

唯識論令於唯識深妙理中得如実解故作斯論

前僧正實聡

形なりと思ふむすまるは海を渡れにならひの法をうつめ

未得真覚恒処夢中の心を

前大僧正覚憲

なかなかにねさめやしてぬらかられ夢の内に夢さへたるはかなき

題しらす　後白河院御製

夢ならぬ夢さめしと思ふ心こそうきをうつゝのかなしかりけれ

千首歌よませ侍りけるに

後宇多院御製

わかく庭その法につたへてそ三世にかよふ道と成りける
乾しつ次

僧正道意

法の庭かさねてそへし法の庭かさねつゝわかれしあとのしるし成りけり
一流の法門をつたへ侍ける時

前僧正慈勝

法の庭そこにいひやる(?)むかし法の道なる我の末をへたてぬはに
乾しつ次

天台座主兼覚法親王

法の庭きそていふ道をさすてにおもひねは我山川のなかれなりけり

源空上人

春には我ちそおほく(?)もしらすむかしの法をはしめなくして

續後拾遺和歌集巻第二十

神祇哥

太神宮によみてたてまつりける百首哥中に

皇太后宮大夫俊成

かけねかふまことのこゝろのみやはしら[?]たてそめしよりいくよへぬらん[?]

題しらす

権中納言師時

神風やいすゝ河波かすしりて[?]万代か君をまもるらん[?]

石清水社哥合に桜を

前大納言隆房

神まつる尾上ひとよに[?]諸人のかさしにむかふ尾上の桜かな[?]

松尾社によみて奉りける百首哥中に

為道朝臣

ゆたかなる萬代かけて[?]のさす神に[illegible]森のむろの[?]

賀茂臨時祭試楽の日舞人かさしの竹折れたりけるを御覧してよませ給ける

御製

霜さえしよはいかにしてさす竹の大宮人の袖の色となり[?]

松尾祭行事弁にてまいりて侍りけるに内侍[?]ねんころに[?]

おほせ[?]けるをいひつかはしける

前左兵衛督惟方

ゆふかけて[?]上つせや[?]出川[?]人松の尾山[?]夜そ[?]深[?]

一條院御時の例にて後一條院春日社に行幸あり

けるに上東門院にまゐりて後いまゐりはべりしに法成寺入
道前摂政そのかみやつかうまつりて春日社にまうでたまひける
ひとりまゐりて侍りければ　上東門院
くもりなき代の光にや春日野のおなじ道にもたづねゆくらん

神祇を　前大納言為家
春日野のむかしの跡をむねとしてそ神のもりのひさしかるらん

春日若宮神主男代はなりける年と思ふらん
中臣祐春
春日山代々をかさねてつかへけるかのそのかみの人はたのまし

題しらす　前関白左大臣　一条
行すゑも神のめくみに任せつゝ代々の跡をはかさねかさなん

後三条前内大臣大将になりて春日社神拝し侍ける
時あひころひくらん侍ける
入道前太政大臣
今はまた千代のみかさ山二たひならふみちの神の恵みに

社頭祝を　津守国助
神の代やみかさの山にすみそめて君と民とをはくゝむ千年

社頭雪といふ事を　従三位氏久
住吉のあらむ年をはあまたへぬ神代の松にふれる白雪

四条皇太后宮位若小宮にて行末ときこえ給ける
康資王母
住よしの松と共にて年経ともかはらぬ色の万代を見ん

上東門院おほん神へまうでさせ給ふに左兵衛督にて侍

りけるに供奉にて讀侍りける　土御門右大臣

住吉のまつのひめ松立出て君か千とせをみゆるなりけれ

保元二年十二月に鳩の入りたりけるを住吉社にて見

侍りて　前大納言經房

君か代の志るしとそみる千年ふる此松風のこゑのしらへを

藤原範永朝臣攝津守になりて住吉にまうでゝ時

杀松になりひ侍りける時松のもとにて讀侍りける

侍りける　津守国基

我すこそ神さひ増され住吉の松にかけたるしらゆふを見よ

住吉の神もうれしくおもふらん侍りけり

道済

宮柱ふときたてゝ我國に世をおさむる住吉の神

をしへ次　平時香

住吉の岸なる草はしけれとも神よもしらの言は知られ

津守國道

海とおなかる神よつけてさすらへのこのまにまに住吉の神

文保百首歌にてよみ侍りける　民部卿為藤

行めくりて浪目に此神の誓ひの深きより住吉の岸

神祇の方とてよみ侍りける

後醍醐院御製

あはれまさき日よしかけてなほたのむかけるへきさ雲の上かな
十禅師宮にまいりてよみ侍ける
前大僧正道玄
神代よりてらす月をみても又晴ぬこの心ひとつかな
前大納言為世よませ侍ける日吉社歌合に神祇
前僧正桓守
いく千代をちりにまじはるかけすみてきえぬをつくる法の灯
題しらす
入道親王尊円
たのみをかけしみ山のたへなるを神もたひらの我たのむ道
祝部成久
かしこくにわかなのえにかけて出七の道を神の七の中にて

前僧正桓守人々にすゝめて日吉社にて三首歌奉り
侍ける時神祇
法印長舜
あはれとも七の道を神をてらしみよこの光をかくす国のおもを
鳥羽院御時社をとらせ給ひけるに夢にすみて侍しに
心静にねて見侍る
仁俊法師
阿もにもうを神にならひいにしへの人にそひとつにならべし
それならなきあけにそれをたのむと頼む
春日社に法楽にてまつりける歌の中に
安嘉門院高倉
神ならふくいそもさかの世のここ世の道を神そまちなん
おなし社によみてたてまつりける歌の中に

前大納言為世

後の世もこの世も神のしるへにてふかくそたのむ身の行末は

神祇をよめる　　祝部行氏

治る色こそ八十にはあまるらめ神のめくみの久しかりけり

津守国夏

君か代をいのるかひあるみしめなは神の心にかけて引らん

文保百首哥たてまつりける時

権中納言公雄

ゆふかけて我代をいのるさかき取八十氏人の心なりけり

題しらす　　度会常良

民のため代々のすゑまてあはれめる神わさしけき御国はさかえん

百首歌奉りし時　　関白太政大臣

天地の神のたもてる国なれはいつくにもまた君をまもらん

題しらす　　沙彌

見る代々のあとみつけてそやはらく神の鏡のくもりなく

清輔朝臣

くもりなき国のしるしとみえつるや天照ひるめの鏡なるらん

日本紀をひらきみくらふる時

賀茂久世

くもりなくあきらかならて月や神代よりかけし鏡なるらん

題しらす　　鎌倉右大臣

宮柱のりの和哥の松たてゝ万代まてとさかえん玉津嶋守